

Title	ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』初稿(1821年): 翻訳の試みと覚書(4)
Sub Title	J.W. Goethe : Wilhelm Meisters Wanderjahre (I. Fassung) Übersetzung und Anmerkungen (4)
Author	山本, 賀代(Yamamoto, Kayo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.61 (2021.) ,p.19- 50
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20210331-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ
『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』
初稿（1821年）

——翻訳の試みと覚書（4）——

山本賀代

試訳¹⁾

第8章²⁾

「ヴィルヘルムからナターリエへ」

人間というものは、実に社会的で話好きな生きものですね。それ以上に

- 1) 翻訳の底本には Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 40 Bde. Hg. von Hendrik Birus u.a. Frankfurt am Main 1987–2013 [=FA] の Bd. 10: *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. Hg. von Gerhard Neumann u. Hans-Georg Dewitz. Frankfurt am Main 1989 [=FA10] を使用し、本書の詳細な解説・注釈とともに Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Hg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert u.a. München 1985–1998 [=MA] の Bd. 17: *Wilhelm Meisters Wanderjahre. Maximen und Reflexionen*. Hg. von Gonthier-Louis Fink, Gerhart Baumann und Johannes John. München 1991 [=MA17] を常に参照した。今回訳出した範囲は FA10, S. 59–84。脚注には、主として2稿との異同（明確な変更箇所はアンダーラインで示す）や、執筆・改作過程に関する情報を記した。ただし引用符の有無、コンマ・コロン等の記号の変動や正書法の修正・変更については省略した。以下、作品名は『遍歴時代』と略す。
- 2) 前回訳出した第7章の終わりは2稿の第4章の終わりに対応していた。

はそこから何も生まれないとしても、自分にそなわった力を発揮するときの喜びは相当ですよ。人が集まると、一方が他方に喋らせてくれないという苦情をよく聞きますが、同様に、書くという行為が、もし孤独にひとりで行われる作業でないとすれば、一方が他方に書かせる間を与えてくれないという文句が聞かれることでしょうね。

人間がどれほどたくさん書くかは把握できないほどです。そのうち印刷されるものだってすでに十分あるわけですが、私が今、話題にしたいのはそうした印刷物のことではありません。個人の現状を記した手紙、報告書、物語、逸話、記録、つまり手紙や比較的長めの文章となって静かに広まっているもののことなのです。これらは、今の私のように、いくつかの³⁾ 教養ある家族たちのもとでしばらく生活して初めて想像することができるものでしょう。私が今いるところでは、友人や親戚に自分の活動について報告するために、人はほとんど仕事に精を出すのと同じだけの時間を費やしています。もう数週間前からいくつかの交際のなかで⁴⁾ 気づいたこの考えを、私はいっそう喜んで君に伝えたいと思います。というのも、新しい友人たちが書くことをこよなく愛しているおかげで、私は彼らの諸々の状況をすばやく、あらゆる方面から知ることができたのですから。彼らの信用を得た私は、ひと束の手紙と数冊の旅行日誌、自分自身と和解できずにい

2 稿第 5, 6 章では、まず伯父の所有地でのヴィルヘルムと家族たちの交流（ノヴェレ「気のふれたさすらいの女」を含む）が始まり、そのあとで今回訳出する家族間の書簡、続いてヴィルヘルムからナターリエへの手紙が挿入される。2 稿では、ヴィルヘルムは家族とのさらなる交流のなかでこの家の歴史（伯父のアメリカ体験など）に通じ（第 7 章）、ノヴェレ「裏切り者は誰か」（第 8, 9 章）挿入の後、この家族の中心的存在であるマカーリエのもとを訪れ、彼女の神秘に触れ、レナルドー訪問を託される（第 10 章）。一方、初稿では、ヴィルヘルムと家族との交流の直接的な描写は存在せず、まずヴィルヘルムからナターリエへの手紙、次に家族間の書簡、その後、すぐにレナルドー訪問となる（本稿末の対照表も参照）。

3) 2 稿では削除。

4) 2 稿では「数日来」（FA10, S. 339）に変更。

る人間の告白録を受けとったのです。こうして私はあつという間にこの家のことを隅々まで知るようになりました。今では彼らがもっとも懇意にする交友関係や知人も把握し、その人たちとこれから近づくになる予定なのです。彼らから、私は本人たち以上にこの家族のことを知るようになるでしょう。というのも、本人は自分たちの状況にとらわれていますが、いつも君の手に導かれている私なら、なにごとも君と語りあいながら、彼らのそばを漂っているだけなのですから。しかも君にすべてを伝える許可がなければ信頼に応えることはできない、これが私の第一条件です。そういうわけで、ここに数枚の手紙をお届けします。それらは、誓約を破ったり回避したりする必要もなく、私が今、行き来している集団のなかへ君を案内してくれるでしょう。

くるみ色の少女⁵⁾

「レナルドーから伯母へ」

非常に奇妙な私たちのとり決めにしたが、3年がたってようやく伯母さまは私からの最初の手紙を受けとられます。私は世間を見たい、世間に身を投じたいと考え、再び戻りたいと願う生まれ故郷のことをしばらくのあいだ忘れようと思いました。すべての印象を心にとどめ、個々のものに心

5) ここから第8章の終わりまでは、まずコッタ書店発行の1816年版『婦人年鑑』（1815年刊行）に「くるみ色の少女」のタイトルで公表された。*Taschenbuch für Damen auf das Jahr 1816*. Tübingen in der J. G. Cotta'schen Buchhandlung, S. 1–34.『婦人年鑑』はBayerische Staatsbibliothekのデジタル・アーカイヴで閲覧可能。<https://opacplus.bsb-muenchen.de/Vta2/bsb10925251/bsb:10615520?page=57>（最終閲覧2020年12月7日。）『婦人年鑑』と初稿における「くるみ色の少女」の異同は、「聖ヨゼフ二世」（1810年版『婦人年鑑』）の場合と違い、細かい語彙、語順、綴りのレベルでの修正や文章の推敲が全体にわたって多数存在する。しかし内容にかかわる変更はなかったので、本稿では異同の指摘は省略した。

を奪われ遠くに迷いこむことはするまいと考えていました。しかしそのあいだも、必要な消息は折にふれて交わしてきましたね。お金を届けていただいたこともありました。私の親しい人へのちょっとした贈り物をあなたに委ね、分配していただいたこともありました。届けた品物から、彼らは私がどこでどんな風に暮らしているのか推測することができました。きっと伯父さまは、ワインの味から私の滞在地をその都度言いあてられたでしょう。レース編み、流行の小物雑貨、銅鉄製品は、ブラバントを通過しパリを經由してロンドンに向かった私のルートをご婦人方にお示しするものでした。私は、彼女たちの書きもの机、裁縫台や茶卓のうえに、また部屋着や晴れ着にも、私の旅先の物語と結びついた記念品をいくつも見いだすことができるでしょう。私からの便りはなくても、彼らは私の旅に同伴していたのですから、ひょっとすると、これ以上知りたいという好奇心もお持ちでないかもしれません。一方、私のほうでは、私の帰りを待つ仲間たちが一体どのような状態なのか、伯母さまの善意を通じてどうしても知らなければならぬのです。実際に私は、ひとりの異邦人として異国から故郷に入ろうとしているのです。気持ちよく受けいれてもらえるように、よそ者はまずその家庭の希望や嗜好を確認するもので、自分の目や髪が美しいからといって、自分のやり方で受けいれてもらえるはずだなどとはうぬぼれないものです。ですから善良な伯父さまのこと、愛すべき姪たちのことそしてご自身のことについて、私に手紙でお知らせください。近い者も遠い者も私たちの親戚一同について、そして古い使用人についても最近雇われた使用人についてもお願いいたします。とにかく、甥に手紙を書くためにインク壺に浸すことの長らくなかった筆をもう一度手にとり、どうか伯母さまの達筆をふるってください。情報に満ちたあなたのお手紙を受け取りましたら、ただちに私はそれを訪問の際に携える信任状とするつもりです。つまり私を腕に抱いて再会できるかどうかは、伯母さまにかかっているのです。思うほどには人は変わりませんし、状況もたいていの場合、非常に似たようなままでしょう。変化したものではなく昔ながらのものを、

少しずつ増えたり減ったりしたものを、私は一気に再確認しようと思います。そして自分自身を昔なじみの鏡のなかに映しだしたいのです。家族一同に、どうぞ心からの挨拶を伝えてください。私の不在も帰還も奇妙なやり方ですが、そこには、いつも心にかけて頻繁に手紙を出す場合にもおよばぬほどの愛情がこもっていることを、どうか信じてください。みなさんにどうぞよろしく！

「追伸」

伯母さま、どうぞ私たちの使用人たちについても、領地裁判官や小作人たちがどうしているか、一言添えるのを怠らないでください。ヴァレリーネはどうになりましたか？ 私が出発する少し前に、伯父さまが追いだした小作人の娘です。伯父さまの処分は正当でしたが、私にはかなり厳しいものに思われました。このとおり、私はまだ事情をいくつか覚えているのですよ。いえ、おそらくすべてを覚えています。私に現在のことをお伝えくだされば、過去のことについて試験をしてくださっても結構です。

「伯母からユリエッテへ」

ねえ、おまえたち、3年間沈黙を続けた男からついに手紙が来ましたよ。それにしても、変わった人間というものは本当に変わっていること！ あの子は、自分が送った品物や記念品が、友人に言ったり書いたりできる心のこもった無二の言葉と同じように素晴らしいものだと思っているの。あの子は実際、自分が前貸ししている立場だと信じていて、自分ではあんなに頑なにそっけなく拒んできたものを、今、私たちのほうからまず差しだしてもらおうつもりなのです。どうしたらいいかしら？ 頭痛さえなければ、私としては彼の希望を受け入れ、すぐに長い手紙を書いてやりたいところなんだけど、頭痛のせいでこの手紙すら最後まで書けそうにないの。私た

ちはみな、彼に会いたがっているわ。そこで、おまえたち、この仕事を引きうけてもらえないかしら。おまえたちが書きおえるまでに私の頭痛が治ったら、私の分は自分で書くつもりよ。おまえたちが書きたいように、人物や事件を選んでいいわ。ふたりで分担してちょうだい。おまえたちのほうが私よりもなんでも上手にやってくれるでしょう。おまえたちからの一言を使いに託して、私によこしてくれるかしら？

「ユリエッテから伯母へ」

すぐにお手紙を拝見し、よく検討しました。私たちの考えは使いの方にお預けいたします。私たちがまずふたりで意見を一致させたのは、いつも甘やかされてきたあなたの甥に対して、私たちは優しい伯母さまのように親切になれないということです。彼は3年間も自分の手札を隠しておいて、おまけに今も隠したままなのに、私たちのほうには手札を並べ、オープンにしたままで手札を隠した相手と勝負しろと言ってきたのです。まったく不公平な話ですが、まあ、そこは我慢いたしましょう。細かすぎる人は身構えすぎて、自分を欺くことにもなりかねませんもの。ところが彼に何をどのように送ればよいか、そのやり方に関しては私たちのあいだでも意見が分かれますの。身内についてどう考えているかを書くなんて、少なくとも私たちの場合には奇妙な課題です。家族のことを考えるのは、普通は楽しいことがあったとか不愉快なことがあったとか、そのような特別な場合にかぎるわけで、そうでなければ、それぞれ相手に好きなようにさせているものですわ。この課題をこなせるのは伯母さまだけではないでしょうか。伯母さまは洞察力と公平さをかねそなえていらっしゃるから。ご存知のように熱しやすいヘルジーリエは、すぐさま即席で面白おかしく家族全員について批評してくれました。紙に書いてもらいたいですわ。それを読めば、ご体調の悪い伯母さまでも微笑まずにはいられませんもの。しかしそれを彼に送るのは賛成できません。私の提案はこうです。この3

年間に私たちがやりとりした手紙を彼に送りましょう。彼に勇気があれば自分で読みとおすでしょうし、読みたくなければ、実際に見に来ればいいのです。私宛ての伯母さまのお手紙はすっかり整理してありますので、お申しつけてくださればすぐに準備いたします。でもこの意見にヘルジーリエは反対なのです。書類の整理ができていないことなどを理由に挙げていますけれど、伯母さまが本人から直接お聞きになってみてください。

「ヘルジーリエから伯母さまへ」

簡潔に書きますね、伯母さま。使いの人が無作法にもいらした様子を見せるものですから、仕方がないんです。レナルドーに私たちの文通を見せるなんて、人が良すぎて見当違いもいいところですよ。私たちが彼について言った良いことも悪いことも、いったい彼に知らせる必要があるのかしら。たとえ彼が、自分に対する私たちの誠実さを、前者からよりも後者から認めるとしたってだめですよ。お願いしますから、彼をあまり気ままにさせないでください。外国から戻ってくる男性たちははたいていそうなのですが、このような要求にも態度にもどこか計算づくで横柄なところが感じられます。あの人たちはいつも、故郷に残っていた人たちを一人前には扱わないのです。頭痛を口実になさってください。彼はきっと帰ってきます。もしすぐ来なくても、あと少し待つだけのことですよ。今度は隠れて奇妙なやり方で私たちのところに入りこむとか、こっそりと私たちについて調べようとか思いつくかもしれませんね。あんなに賢い男性の計画することですから、なんだって起こりえますよ。でも、なるほど、それもいいかもしれません。彼が今、計画しているように抜け目なく家族のもとに帰ってきたらわからないさまざまな事情も、ひょっとすると明るみになるかもしれませんもの。

この使いの人ときたら！ このおじいさんをもっと上手にしつけてくださいな。そうでなければ若い人を送ってください。この人にはおべっかも

お酒も効果がありません。どうぞお元気で！

「追伸に関する追伸」

従兄は追伸でヴァレリーネについて何を望んでいるのでしょうか？ 彼の質問は二重の意味で気になりました。彼女は従兄が名前と呼んでいる唯一の人物です。私たち他の人たちは彼にとっては無に等しいのです。姪、伯母、使用人、どれも人間ではなく、ただの分類じゃないですか。私たちの領地裁判官の娘、ヴァレリーネ！ ブロンドの美しい娘はきっと出発前のわが従兄さまの目に焼きついたのでしょうか。でも彼女はもう幸せな良い結婚をしましたわ、伯母さまに言う必要もございませんけれど。でも彼は、私たちのことを知らないのと同様、彼女の結婚を知らないのです。伯母さま、同じように追伸で彼に伝えることをお忘れなく。ヴァレリーネは日ごとに美しくなり、それゆえに良縁に恵まれました、今では裕福な地主の奥さまです、ブロンド娘は結婚したんですよってね。はっきり彼に伝えてやってください。でもね、伯母さま、それだけではないんです。彼はブロンド美人のことをよく覚えていながら、彼女をだらしのない小作人の娘、ブルネットのおてんば娘ととり違えているんです。ナホディーネという名の行方不明の娘です。そのことが私にはまったく腑に落ちず、何か裏があるように思えますの。だって、抜群の記憶力を誇っていた従兄が、不思議なことに名前と人物をとり違えているんですもの。ひょっとすると彼もこの間違いに気づいていて、失われた記憶を伯母さまの手紙でよみがえらせようとしているのではないかしら。お願いですから、彼の気まぐれは許さず、ヴァレリーネとナホディーネに関することを探ってみてください。どんなイーネやトリーネが彼の想像力にすっかり保存され、エッテやイリーネがそこから消えてしまったんでしょう。ああ、この使いの方は本当に嫌な人！

「伯母から姪たちへ」（口述筆記）

ともに人生を歩むべき人々に対して、どうしてそんなにしらばくれる必要があるのかしら！ レナルドーには確かに独特なところはあるけれど、信用できるいい子ですよ。彼におまえたちふたりの手紙を送ってやります。おまえたちのことがあの子にもわかるでしょう。私たち他のものたちも、近々、気づかないうちに彼の前に現れることになるかと期待しています。ごきげんよう。私はとても辛いので。

「ヘルジーリエから伯母へ」

ともに人生を歩んでいる人々に対して、どうしてそんなにしらばくれる必要がありますか！ レナルドーはわがままに育った甥よ。彼に私たちの手紙を送るなんてひどいお話だわ。読んだって彼に私たちの気持ちがわかるものですか。私は、別の方面から登場することを希望します。伯母さまは病気のうえに盲目的でいらっしゃるから、他の人たちをも困らせるのね。伯母さまの愛情は救いようがありません。

「伯母からヘルジーリエへ」

修正のきかない私の愛情や病気そして状況がもたらした決意を私が変わえずにいたならば、おまえの最後の短い手紙も一緒にレナルドーに送っていたことでしょう。でも、おまえたちの手紙は出しませんでした。少し前から私たちのところで生活しているあの若者が、ちょうど別れを告げるところです。稀有なきっかけで、彼は私たちのことを深く知るようになりましたが、思慮のある気だてのよい若者です。私は彼を送りだそうと思います。彼は喜んで任務をひき受けてくれるでしょう。レナルドーに心がまえをさせ、こちらに送りこむか、あるいは家まで連れてきてもらうのです。こん

なふうに伯母のほうは性急な決心をとりさげ、別の道に方向転換することができますのよ。ヘルジーリエも考えなおして、発言撤回も辞さない誠さを忘れてはいけません。⁶⁾

ヴィルヘルムが依頼された内容の詳細を正確に話しおえると、レナルドーは微笑みながら次のように応えた⁷⁾。「あなたと私の結びつきは、あなたから聞かせていただく内容に負っているのですから、ぜひもうひとつ質問を追加させていただきたい。伯母は話の最後に、何かあいまいに思われることについて、私に報告するようあなたにお勧めになりませんでしたか？」ヴィルヘルムは一瞬考え、返した。「ええ、思いだしました。あなたの伯母上はヴァレリーネという名の女性についておっしゃっていました。この女性が幸せな結婚をして、望ましい状況にあることをあなたに伝えるようにとことづかりました。」

「おかげで胸のつかえが取れました」とレナルドーは言った、「これで喜んで家に帰ることができます。この少女との思い出が、故郷にもどった私を非難する心配がなくなったのですから。」

「その女性とあなたがどのようなご関係だったのかをお尋ねすることは、私にふさわしいことはありませんが」とヴィルヘルムは言った、「あなたがその少女の運命にどのようなご関係をお持ちだとしても、ご心配される必要はないということです。」

「世にも奇妙な関係なのです」とレナルドーは応えた、「世間が想像するような恋愛関係ではありません。あなたを信用してお話することもできます。実際、事件というものではないのです。しかし私がこう申したら、

6) 2稿では、マカーリエがヴィルヘルムを使者としてレナルドーのもとに送ることが直接示されるこの箇所は削除され、短い伯母からの手紙のあと、冒頭のヴィルヘルムのナターリエ宛て書簡で一連の書簡挿入が終わり、第7章に移る。

7) 2稿では、ここから第11章「くるみ色の少女」が始まる。

あなたはどう思われるでしょう。私が帰郷の旅をためらったのも、家に戻るのを恐れたのも、ご存知のとおりあの風変わりな準備や質問も、すべてはあの娘の様子をついでに知ることを意図してのことだったのです。」

「というのも」と彼は続けた、「よく知っている人間なら、かなり長いあいだ会わずにいても、昔のままに再会できると思います。ですから家族のもとで、私はまもなくまた心からくつろげるでしょう。ただこの娘のことだけが、私には気がかりだったのです。彼女の生活が変わらないはずはなかったのですから。しかし、ありがたいことに良いほうに変化していたのですね。」

「興味をそそられますね」とヴィルヘルムは言った。「あなたは非常に特別なことを期待させますよ。」

「確かにそうかもしれませんね」、レナルドーはそう応えると、次のような物語を始めた。

「ヨーロッパ文化を巡礼するグランドツアー⁸⁾を若いうちになし遂げよう。これが幼いころから抱いていた私の固い決心でした。しかし、よくあることですが、その実行は延び延びになっていたのです。身近なものが私をひきつけて離さず、遠くにあるものは、それについて本を読んだり人の話を聞くにつれ、ますますその魅力を失っていきました。しかし伯父に励まされ、私より先に世界に出ていった友人たちに誘われて、私もついに決心がつかしました。しかも私たちみなが予想していたよりも、その決心は早かったのです。」

「私の伯父は旅行を実現させるために最善をつくさずにはいられず、すぐさま他のことに目をくれなくなりました。彼をご存知なら、常にひとつのことに集中し、それがかなうまでは他のすべてを投げだすことも辞さない伯父の性格をおわかりでしょう。もちろんそうすることで伯父は、ひと

8) 初稿では *das große Wanderungs-Abenteuer*, 2稿では *die herkömmliche Kreisfahrt* (FA10, S. 393)。ちなみに『婦人年鑑』では *die große Tour* (*Taschenbuch für Damen auf das Jahr 1816*, S. 12) であった。

りの私人の力で可能と思われる以上のことをこれまでもたくさんし遂げてきたのです。この旅行は彼には思いがけないことだったのですが、すぐに心を決めてくれました。計画中の、それどころかすでに着手していたいくつかの建設が中止されました。貯蓄にはけっして手をつけたがらない賢明な財政家である伯父は、他の手段を模索しました。もっとも手近な方策は、未回収金、とくに小作地の賃貸料の残金を取りたてることでした。というのも、これも彼の流儀のひとつだったのですが、自分に金が必要でないかぎり、彼はある程度まで債務者を寛容に扱っていたからです。彼の代理人が名簿を受け取りました。実行はこの男に任されていたのです。細かいことは知りませんが、通りすがりに耳に入ったところでは、伯父が長らく我慢してきた私たちの所領のある小作人が、いよいよ本当に追いだされることになったのです。彼の担保は損失分のわずかな代償として差しおさえられ、土地は別の人に貸しだされることになりました。この男は敬虔派のひとりでしたが、彼らのように思慮深くも働きものでもありませんでした。信仰心の厚さと善良さゆえに好かれてはいましたが、家長としては頼りなく、非難されていました。何人かの妻に先だたれたあとは、くるみ色の少女と呼ばれる娘がひとりいるだけでした。丈夫でしっかり者になる見こみは十分でしたが、決然と口をはさむには、彼女はまだまだあまりに若すぎました。ようするにこの男の人生は下り坂となり、伯父の配慮がその運命を食いとめることもできなかったのです。」

「私は旅行のことで頭がいっぱいでしたから、その手段を受け入れるしかありませんでした。すべての準備が整い、荷物はつめこまれ、出発の瞬間が迫っていました。ある夕べ、私は馴染みの木々や灌木に別れを告げるため、庭をもう一度そぞろ歩いていました。そのとき突然、目の前にヴァレリーネが現れたのです。これがこの娘の名前です。くるみ色の少女というのはあだ名にすぎません。褐色の顔色をしていたものですから。彼女が私の道をさえぎりました。」

ここでレナルドは一瞬、考えこんだ。「あれ、どうしたのかな、彼女

は本当にヴァレリーネだったろうか？」彼は続けた、「いや、そうだと。あだ名のほうに慣れていただけだ。そう、この褐色の少女が私の道をささげり、父親のためにそして自分のために伯父に取りなして欲しいと、必死に懇願したのです。状況は知っていましたし、今、彼女のために何かすることなど難しい、いや不可能だということは十分承知していました。私は率直にそう伝え、彼女の父親自身に非があることをはっきり告げました。」

「それに対して彼女があまりにきっぱりと、しかも子どもらしいいたわりと愛情をこめて応えたものですから、私はすっかり彼女に好感をもつてしまい、もし自分のお金であれば、すぐにも彼女の願いを承諾し幸せにしてやるところでした。しかしそれは伯父の収入、伯父の措置であり、伯父の命令でした。彼の考え方やこれまでの経緯からして、希望はこればかりもありません。私は昔から約束というものを非常に神聖視しており、頼まれごとをされると当惑したものです。そのため拒絶することに慣れてしまい、たとえ守ろうと思ったことでも確約はしない人間になっていました。この習慣がこのときも出てきたのです。彼女の言い分の根拠は個人的なことや愛情、私の方は義務と理性によっていました。それが彼女にはあまりに過酷すぎるのではないかと、最後には私にも思えてきたことは否定しません。同じことを何度もくりかえしましたが、互いを納得させることはできません。追いつめられて彼女はますます雄弁になり、避けがたい目前の没落を思い、涙をぼろぼろとこぼしました。彼女の話し方は激しく、興奮していましたが、平静さを完全に失うことはありませんでした。しかし私があいかわらず冷静さと落ちつきをよそおうと、彼女は感情をすべて外にあらわしました。この状況をもう終わらせたい、そう私が願ったとき、突然、彼女は私の足もとに身を投げ、私の手をとってキスをしました。そして極めて上品に愛らしく懇願しながら私を見あげるものですから、この瞬間、私は自制を失ってしまいました。とっさに彼女を抱きかかえながら、『可能なことをやってみるから安心しておくれ』と言って、私はわき道に向かったのです。『不可能なことでもやってください！』後ろから彼女の声がか

しました。何を言おうとしたか、私はもう覚えていません。『私がしようと思うのは』——ここでつかえました。『やってください!』同時に彼女は晴れやかに叫びました。大きな信頼を寄せた表情で。私は彼女に挨拶して、急いでその場をたち去ったのです。」

「伯父のところすぐに駆けこむつもりはありませんでした。彼のことは知りすぎるくらいでしたから、全体的なことを企てているときに、伯父に個々の部分に注意を促すなどできないことはわかっていました。私は代理人を探しましたが、彼は外出中でした。その夜は大勢の来客がありました。友人たちが別れを告げにやって来たのです。カード遊びや飲み食いも夜中まで続けました。結局、彼らは翌日も居つづけ、遊びに興じているうちに、あの懇願する少女の切実な姿は薄れていきます。代理人が帰宅しましたが、ますます忙しく、彼のまわりにこれほど人が集まるのを見たことがありません。みんな彼に聞きたいことがあったのです。私の話を聞く時間など彼にはありませんでした。それでも私は苦勞して彼を引きとめました。ところが私があの敬虔な小作人の名前を口にするや、彼はきっぱりと私の話をはねつけました。『最後の段になって今さら面倒ごとを起こしたくなければ、後生ですから、あの方にそんなことはおっしゃらないでください。』私の出発日はすでに決まっていました。手紙も書かなければならないし、来客のお相手もしなければなりません。近所への挨拶もありました。使用人たちはそれまでの私の生活には十分でしたが、旅立ち前の雑用を楽にしてくれるほど有能ではありませんでした。すべて私がやらなければならないのでした。あの実務家が最後に夜の一時間を割いて、私たちの金銭問題の整理をしてくれたとき、私は思いきってもう一度、ヴァレリーネの父親のことをお願いしました。」

「この要領のよい男は言いました。『男爵さま、どうしてそのようなことを思いつかれるのでしょうか？ 実は今日も私はあなたの伯父さまともめてきたところですよ。あなたの出発のために必要な資金が、私たちが計算していたよりもずっと高くつくものですから。当たり前のこととはいえ、や

はり厄介ではございます。特に年配のご主人さまは、事が片づいたと思ったのにあとから何か問題が起こると、ご機嫌が悪いのです。ところがそういったことはよく起こりまして、しりぬぐいしなければならぬのはわれわれ部外者なのです。滞った借金の取りたては厳しく行なうべきであると、伯父さまは自ら決まりをたてられました。この点での彼の決意は固く、くつがえそうとしても難しいでしょう。そんなことはなさらないでください。お願いします！ どうせ無駄なことですから。』

「これ以上頼む気も失せましたが、まだ完全にあきらめたわけではありません。なんといっても実行するのは彼ですから、穏やかに公正に処理するように私は彼に迫りました。この手の人物の流儀にしたがい、彼はその場しのぎにすべてを約束し、私を厄介ばらいしたのです。ますます焦り、落ちつきがなくなりました。こうして家にいればまきこまれたはずのことに背を向け、私は旅の人となったのです。」

「生き生きとした印象は傷のようなものです。受けたときには感じませんが、後になって痛みはじめ、化膿するのです。私にとってあの庭での一件がそうでした。ひとりで暇にしていると、いつもあの哀願する少女の姿が思いうかびました。まわりの風景も一緒にです。木々や灌木、彼女がひざまずいた場所、そして彼女から離れるために向かったわき道。すべてが一緒に鮮やかな映像となって私の心に見えるのです。それは消しざることのできない印象で、他の姿や関心によって曇らされたり隠されたりすることはあっても、決して完全に失われることはありませんでした。静かな時間になると、いつもあらたによみがえってくるのです。しかも後になればなるほど、自分の主義や習慣に反して背負いこんでしまった罪を感じて、ますます苦しくなるのです。あいまいに、つかえながら、初めての経験にただうろたえてのことだったというのに。」

「最初のうちは、手紙で事のなりゆきを実務家に尋ねることを怠りませんでした。彼は時間かせぎの返事をしてきました。その後、この件について応えるのを躊躇し、言葉はあいまいになり、最後には完全に沈黙してし

まいりました。故郷から遠ざかり、ますます多くの事がらが私と故郷とのあいだに割りこんできました。視察したり、自ら関与するべきこともいろいろありました。そのうちにあの光景は薄れ、今ではほとんど彼女の名前も覚えていないのです。彼女との思い出が浮かぶことはますます稀になりました。さらに私は気まぐれから、手紙ではなく記念品だけで家族とやりとりをしましたので、このことも私の以前の状況をその諸条件もろとも消しさを促進しました。ところが故郷に近づき、家族にこれまで欠けていたものを利子をつけてお返ししようとする今となって、この奇妙な後悔が——本当に奇妙としか言いようがありません——私をものすごい勢いで襲ってくるのです。少女の姿が家族の姿と一緒に鮮やかに心に浮かんでくるのです。私がつき落とした不幸のなかで彼女は破滅した、そう聞かされるのを私は何よりも恐れています。だって私には、自分の怠慢な行ないが彼女の破滅を呼び、彼女の悲しい運命を助長したように思われるのですから。もう何千回口にしたことでしょうか。このような感情は結局人間の弱さにすぎないのだ、私が昔、約束はしないと掟をたてたのは、ただ後悔を恐れてのことで、高貴な感情にかられてのことではなかったのだと。そして今、私が遠ざけてきたまさにその後悔が、私を苦しめようと、この一度の機会をとらえ、私に千倍も復讐しているようです。それにもかかわらず、あの姿、私を苦しめるあの光景はとても感じがよく愛らしいので、私は喜んでこの思い出のなかに浸ってもしるのです。彼女が私の手におしあてたキスが、今も私の身を焦がすように思われます。」

レナルドーが話しおえると、ヴィルヘルムがすぐに嬉しそうに応えた。「それでは私は、つけ足しの報告によってこれ以上ないほどあなたのお役にたてたというわけですね。ちょうど追伸のなかにその手紙のもっとも興味深い内容が含まれていることがあるように。もちろんヴァレリーネのことはほんの少ししか知りません。通りすがりに耳にしたくらいですからね。それでも彼女が裕福な地主の妻となり、満足な暮らしぶりであることは、別れ際に伯母さまがはっきりとおっしゃっていました。」

「よかった」とレナルドーは言った、「これで邪魔はなくなりました。あなたが私を解放してくれたのです。私たちはすぐに家族のもとに帰りましょう。そうでなくても妥当以上に長く待たせているのですから。」それに対してヴィルヘルムは言った、「残念ですが、あなたとご一緒することはできないのです。私には守るべき奇妙な義務があり、どこにも3日以上留まることは許されず、滞在した場所に1年以内に再び足を踏みいれてもいけないのです。申し訳ないことに、この奇妙な義務の理由を話すことすら禁じられているのです。」

「それは実に残念ですね」とレナルドーは言った、「こんなにすぐに別れては、あなたのお役にたつこともできません。ところで、あなたは私へのご親切の道を一度踏みだされたわけですから、ついでにヴァレリーネを訪問し、彼女の様子をその目で確認し、口頭なり書面なりで——落ちあう第三の場所はきっと見つかります——詳しく報告し、私を安心させてくださるならば、本当にありがたいのですけれども。」

この提案についてさらに検討がなされた。ヴァレリーネの住んでいる場所はヴィルヘルムには伝えられていたので、彼はこの訪問を引きうけ、第三の場所も確定した。そこに男爵レナルドーが、女性たちのもとに残されたフェーリクスを連れていくことになった。

レナルドーとヴィルヘルムは気持ちのよい草原を並んで馬に乗り、さまざまな話題に興じながらなおしばらく旅を続けた。いよいよ大きな通りに近づき、主人につき添われ故郷に帰るはずの男爵の馬車に追いついた。友人となったふたりはここで別れるつもりだった。ヴィルヘルムは短く愛想のよい言葉で別れを告げ、男爵にもう一度、ヴァレリーネについて早々に報告すると約束した。

「考えてみますと」とレナルドーが返した、「あなたに同伴してもほんのまわり道に過ぎないので、どうして私が自分でヴァレリーネを探しだしてはいけないことがあるのでしょうか。どうして彼女の幸せな状況をこの目で確認してはいけないのでしょうか。あなたは親切にも使者を引きうけ

てくださったのですから、私の道づれになることも厭わないでしょう。私には道徳的な援助者となってくれる同伴者が必要なのです。自分が訴訟に詳しくないと思う場合に、法律に関する補佐人を雇うようなものなのです。」

ヴィルヘルムは、家では長らく不在だった人を心待ちにしていると、馬車だけが帰宅したら奇異な印象を与えるだろうとか、他にもいろいろな理由を述べて反論してみたが、レナルドーは聞く耳をもたなかった。結局、同伴することを承諾しなければならず、よくない結果が懸念されたヴィルヘルムの気持ちは沈んだ。

到着したらどのように説明すればよいか従者たちに教えこむと、ふたりの友はヴァレリーネの居住地に続く道を進みだした。あたりは変化に富んだ肥沃な土地で、農業の中心地のようなようであった。ヴァレリーネの夫の所有地区も同様で、大地は入念に耕されていた。ヴィルヘルムには風景をじっくり観察するゆとりがあったが、レナルドーは彼のとなりで無言のまま馬を進めた。ようやくレナルドーが話しはじめた。「他の人間が私の立場だったら、名を伏せてヴァレリーネに近づこうとするかもしれませんね。傷つけてしまった人を目の前にするのは、どうにもやりきれない気持ちになるものです。しかし私はそれを引きうけ、変装したり虚偽で身を守るよりも、彼女の最初のまなざしに現れるであろう恐ろしい非難に耐えるつもりです。嘘は真実と同じように私たちを混乱させる可能性があります。そして前者と後者のどちらがより役だつかと天秤にかければ、最終的には真実に身をゆだねるほうが骨折りがいもあるでしょう。ですから恐れず進みましょう。私は本名を名のり、あなたを道づれの友人として紹介するつもりです。」

ふたりは農園に到着し、その敷地内で馬を降りた。小作人とましがえそうな質素な身なりの、堂々とした男がふたりを迎え、この家の主であることを告げた。レナルドーが名のると、地主は彼と知りあえたことを非常に喜んでいて様子だった。「妻はなんと言うでしょう」、彼は叫んだ、「恩人

の甥ごさんと再会できるなんて。彼女とその父親があなたの伯父さまにどれだけお世話になったかを、彼女は語りつくせません。」

レナルドーの頭には直ちになんとも奇妙な考えが交錯した。この男はこんなに正直そうに見えて、苦々しい思いを愛想のよい顔と物腰やわらかな言葉の裏に隠しているのだろうか？ 数々の非難の言葉にこんな感じのよい外面を与えることができるのだろうか？ だって私の伯父はこの家族を不幸にしたのではなかったか？ そのことを彼が知らないはずはないではないか？ それとも、お前が考えているほど事態は深刻にはならなかったのだろうか？ 希望がさっと彼の頭をよぎった。なにしろ明確な報告を受けたことは一度もなかったのだ。こうしてあれこれと推測しているうちに、主人は近所に出かけていた妻を連れもどすために馬車の用意をさせた。

「もし妻がもどるまで私にお相手させていただき、同時に私の仕事も続けてよろしければ、少しばかり田畑に出て、このあたりの経営状況をご覧になってはいかがでしょうか。と申しますのも、大地主でいらっしゃるあなたには、農業という尊い学問や技術以上に気にかけておられるものはないでしょうから。」レナルドーは反対しなかった。ヴィルヘルムは案内を喜んだ。この農業家は、自分の管理する広大な所有地を完全に把握していた。彼が企てたことはその意図にかない、彼が撒き苗を植えたものは見事に育成していた。彼は扱いかたやその理由をわかりやすく説明したので、誰もが理解し、自分も同じことを行ない、なし遂げられると思った。もっともそれは、巨匠によってすべてが軽々となされるのを見て、人が陥りがちな幻想にすぎないのである。

よそ者たちは非常に満足し、賞賛と賛同以外には言葉が出なかった。男はそれを感謝と喜びの気持ちで聞きながら、次のようにつけ加えた。「しかし私は自分の弱点もお見せしなければなりません。もちろん、ひとつの対象に専念する者には誰にでも認められる欠点なのですが。」彼はふたりを中庭に案内し、彼のそろえた農具やその予備品を見せた。考えられるかぎりのあらゆる機械類とその付属物であった。「やりすぎだと私はよく怒

られます」と彼は説明した、「しかし私には自分を責めることができません。自分の仕事を人形遊びをするように楽しむことができるようになる人、立場上の義務に喜びを見いだせる人は幸せです。」

ふたりの友は熱心に説明を求め、あれこれ質問した。とりわけヴィルヘルムは、この男がねらっているらしい一般的な見解をおもしろがり、返答を怠らなかつた。一方、レナルドーはむしろ考えこみ、この状況では確実と思われるヴァレリーネの幸福をひとり静かに共有する思いであった。しかしどこか釈然としない、かすかな不快感がそこに混じっていた。

地主夫人の馬車が到着したとき、彼らはすでに屋敷にもどっていた。みな急いで彼女を迎えに出た。しかし馬車から降りてくる女性を見て、レナルドーはどんなに驚き、愕然としたことだろう。彼女ではなかつた、あのくるみ色の少女ではなかつたのだ。まったくその反対だった。同じように美しくすらりとした容姿だったが、髪はブロンドで、ブロンド女性に特有のあらゆる長所をもっていた。

この美しく優美な女性にレナルドーは驚いた。彼の目は褐色の少女を探しもとめたが、今、彼の目に映るのはまったく別の姿だった。しかしこの表情にも見覚えがあった。彼女の話しかたや立ちいふるまいから、彼はまもなく確信にいたった。それは伯父のところで信望のあつかった領地裁判官の娘だった。だから伯父は嫁入り仕度の際に気前よく出資し、新婚夫婦たちはたいそう助けられた。これらすべてのこと、さらにはその他のことも、この若い女性は最初の挨拶で嬉しそうに説明した。喜びのあまり彼女は再会の驚きをそのまま口にした。お互いがわかるかどうかを尋ねあい、この年齢の人々のあいだで目につく容姿の変化も話題になった。ヴァレリーネは日頃から感じのよい女性であったが、嬉しさで普段の冷静さが失われ、本当に愛らしい様子だった。誰もがおしゃべりになり、会話がはずんだ。レナルドーも落ちつきを取りもどし、動揺を隠すことができた。この稀有なできごとについて友からすばやく目配せされたヴィルヘルムは、できるかぎり彼を助けた。ヴァレリーネのほうでは、男爵が家族に会うより

先に自分のことを思いだし、たち寄ってくれたことにうぬぼれを感じ、そこに何か別の意図あるいは誤解があるとは露ほどにも疑わなかった。

男たちは一刻も早くふたりきりで話したかったが、一同は夜遅くまで一緒に過ごした。ついに客室でふたりきりになると、すぐに会話が始まった。

「私は苦しみから逃れられない運命のようです」とレナルドーは言った。「不運にも名前をとり違え、苦しみは倍増しています。このブロンド美人がくるみ色の少女——あちらは美人とは言えませんでした——と遊んでいるのを私はよく見かけたものです。そればかりか、私は彼女たちよりもずっと年上でしたが、畑や庭を一緒に駆けまわっていたものです。しかしふたりが私に印象を残したわけではなく、せいぜい一方の名前を覚えていたくらいなのです。しかももう一方と結びつけて。私と関係のない女のほうは、今では彼女なりに非常に幸せそうです。しかしもう一方は世間に投げだされ、行方もわからないのです。」

翌朝、ふたりは働きものの農夫に負けなくらい早く起きた。ヴァレリーネのほうも、客人たちに会うのが楽しみで同じように早起きだった。彼女には、ふたりがどんな気持ちで朝食に現れたのかわからなかった。くるみ色の少女の消息が知れず、レナルドーが辛い気持ちでいることを十分に承知しているヴィルヘルムは、話題を昔のことや幼友だちのこと、彼にもなじみとなった土地のことやその他の思い出話に誘導した。その結果、ヴァレリーネの話はごく自然にくるみ色の少女に行きつき、ついにその名前が彼女の口にのぼった。ナホディーネという名前を聞いたとたん、レナルドーは完全に思いだした。名前と一緒に、少女の哀願する姿が強烈によみがえり、後日談を聞くのが耐えがたかった。ヴァレリーネは心からの同情をこめて、敬虔な小作人の差しおさえ、あきらめ、そして小さな荷物をもった娘に寄りかかりながら引っ越していった様子を物語った。レナルドーは気を失うかと思った。しかし、幸か不幸か、ヴァレリーネは細部にわたり報告することに夢中だった。レナルドーの心ははり裂けんばかりであったが、となりで気づかう友のおかげでかろうじて自制を保っていた。

夫婦は近々また訪問してほしいと心から願い、ふたりの客は適当に承諾の返事をして暇を告げた。良いことがあって喜んでいる人間にはすべてが幸せな方向に進むように、ヴァレリーネはレナルドーが黙りがちで、別れぎわにも見るからに気もそぞろに慌ただしく去っていった様子を、自分に都合よく解釈した。有能な農業家の誠実で愛情にあふれた妻でありながら、かつての地主が自分に対する好意を再びよみがえらせたのではないか、あらたに愛情を感じたのではないかと想像し、くすぐったい気持ちをおさえることができなかった。

この奇妙なできごとの後で、レナルドーは言った、「私たちは素晴らしい希望を抱いていたのに、港にたどり着く直前に座礁してしまいました。それでも私が自分を慰めることができ、とりあえずは心を落ちつけて家族のところに向かうことができるとすれば、それは天が私にあなたのような方をさし向けてくださったおかげなのです。あなたは風変わりな使命をおもちで、どちらの方向に道をとられるのかも、何のために進まれるのかも無頓着でいらっしゃる。どうかナホディーネ探しを引きうけ、彼女について報告してくださいませ。彼女が幸せなら、私はそれで満足です。もし幸せでなければ、私のお金で彼女を助けてあげてください。遠慮せず、出しおしみせずふるまってください！ 私は家に向かい、情報を集めます。そして、信頼できる男をつけて、あなたのもとにフェーリクスを送りとどけます。あなたが考えておられたとおり、同じような子どもたちが成長する施設にご子息をお預けなさい。誰の監督下にあるかは、ほとんどどうでもいいことなのです。しかし、これは確実なことです、あなたにご子息とその同伴者をお待ちになっていただくとうと私が考えている場所、その地方で、あなたはご子息の教育にかかわる最善の情報を与えることのできる男を見いだされるはずです。私の若いころの成長は彼に負うところが多く、もし彼が家のなかで静かに暮らすのを好むのであれば、私はいつも彼を旅の道づれにしたいと思いましたし、少なくともたまには会いたいと思う

ような男なのです。⁹⁾

ふたりはついに本当に別れなければならない地点に到着していた。馬に餌をやるあいだ、レナルドーは一通の手紙を書いた。ヴィルヘルムはそれを受けとると、さらに自分の懸念をレナルドーに伝えずにはいられなかった。¹⁰⁾

ヴィルヘルムは話しはじめた、「私のような立場の者には、ひとりの高潔な男性¹¹⁾を不安から解放し、同時にひとりの人の子を、その子がそのような目に陥っていればの話ですが、苦境から救いだしてほしいという依頼を引きうけることは、非常に望ましいことに思われます。この目標は、これから何が起こるのか、何に出くわすのかもわからない航海の際に、仰ぎみる導きの星のようなものです。しかし私には、あなたが今もお濼しておられる危険をどうしても否定できないのです。あなたが頑なに約束することを拒絶したいというのでなければ、私はあなたにぜひお約束していただきたいのです。この女性はあなたにとって非常に大切な存在になろうとしています。私が実際に幸福な彼女を見いだすにしろ、彼女の幸福を助成することになるにしろ、とにかく私が彼女は順調だと報告しましたら、どうかご自身でもう一度見ようとか、お会いになろうとはなさらないでください。もちろん私はあなたに約束を強要することはできませんし、するつもりもありません。しかしあなたの大切なもの、神聖なるものに誓って、

9) この部分のふたりの会話は2稿で拡大する。初稿ではヴィルヘルムに教育州を紹介するのはヤルノー＝モンターンだが、2稿ではこの箇所ではレナルドーが初めて教育州の存在に言及し、彼が若いころ世話になった男から詳細を得ようヴィルヘルムに勧める。さらに、相続されたものの空き家となった別荘の話をつきかけに、レナルドーはアメリカの地で新たな生活を始める希望を告白する。そこでヴィルヘルムは塔の結社のアメリカ移住計画を紹介し、互いに協働することを勧める。FA10, S. 405ff.

10) 2稿ではヴィルヘルムも塔の結社に手紙を書き、レナルドーの紹介と、3日以上同じ場所にいられないという条件の免除を求める。FA10, S. 407f.

11) 2稿では「高潔な男性であるあなた」と Sie が並列される。FA10, S. 408.

どんな口実が成りたとうとも、あの行方不明の娘にはけっして近づかないことを、あなた自身のため、そしてあなたの家族やあらたに友になった私のためにも、私はあなたに切にお願いします。彼女を見つけた場所や別れた場所を詳しく書いたり話したりすることを、私に期待しないでください。彼女は幸せに暮らしているという私の言葉を信じ、それでこの件から放免され、安心していただきたいのです。」

レナルドは微笑して返した、「私のためにこの任務を引きうけてくださることに感謝しています。あなたがなしうることを、あなたがなさりたいようにお任せいたします。しかし私については、時間と分別と、そしてできることなら理性に委ねていただきたいのです。」

「失礼ですが」とヴィルヘルムは応えた、「愛情というものがどれほど不思議なかたちで私たちのもとに忍びこむかを知っている者にとっては、友人が、彼のおかれている環境や人間関係のもとでは必然的に不幸と混乱をもたらすに違いないものを望んでいることを察すれば、どうしても不安になるものなのです。」

「彼女が幸せだと知れば、彼女のことは忘れるつもりです」とレナルド一は言った。

こうしてふたりは別れ、それぞれの道に向かった。

第9章¹²⁾

快適な道を進むと、ヴィルヘルムはまもなく手紙に書かれた町に到着した。町は明るく立派な造りだったが、その真新しい外観から、このあたりが火事の被害を受けたばかりであることが見てとれた。手紙に書かれた住所を探すと、被害を免れた町はずれの小さな一画に出た。家は古い重厚な造りだったが、よく手入れされ、清潔な外観だった。奇抜にはめこまれた窓のくもりガラスが、内部から見たときの美しい色彩を楽しく想像させた。

12) 2稿では第12章。FA10, S. 409.

実際に家の内部はその外観にふさわしかった。清潔ないくつもの部屋に、すでに何世代にもわたって役だってきたであろう道具類がびっしりと並び、それに混じって新しいものが少しだけ置かれていた。家の主人は同じように飾られた一室でヴィルヘルムを愛想よく迎えた。そこにあるたくさんの時計は、いくつもの誕生と死の時刻を刻んできたものだった。過去は現在に流れこむことができると、まわりの品々が語っていた。

来訪者が手紙を差し出すと、受けとった主人は封を開けようともせず、わきに置いたまま、活発な会話を通じて客人と直接知りあいになろうとした。まもなく彼らはいち早く、ヴィルヘルムがいつもの習慣に反してじろじろと部屋を眺めまわすと、善良な老人は次のように言った。「私のところの様子があなたの関心をひいていますね。ここでは物がどれだけ長く永続しうるのかを観察することができます。世間ではすぐに交代し変化してしまう物に対抗し、変わらぬ物を見ることも必要です。この茶がまは私の両親の代から活躍しておりまして、われわれ家族の団欒の夕べの証人です。この銅製の暖炉のついたては、この古い大きな火ばさみがかきたてる炎から今も変わらず私を守ってくれます。すべてがこのように続いていきます。外的必要品の変化は非常に多くの人間から時間と労力を奪うものですが、私にはどうでもよいことでした。おかげで自分の関心と活動をたくさんの他の対象に向けることができました。所有物に対して愛情のこもった関心をそそぐことは、その人間を豊かにしてくれます。そうすることで、その人はちょっとした物に対しても思い出という宝の山を築くのですから。私の知るひとりの若者は、別れ際に愛する娘から留めピンをそっと奪いとり、毎日それを胸飾りに刺していました。そして彼は、大切に手いれされたこの宝ものを何年にもわたる大きな航海から持ちかえってきました。私たちのようなとるに足らない人間には、きっとこのようなことが美徳なのだと思います。」

「本当は逃れたいのに、心に棘を刺したまま大旅行から帰ってくる者もあるでしょう」とヴィルヘルムは応えた。老人はそのあいだに手紙の封を

切り読んでいたが、レナルドーの状況については何も知らないようだった。というのも、彼は先ほどの考察に再び話題をもどしたからだ。「所有への執着は」と彼は続けた、「私たちに非常に大きな力を与えてくれます。私がありますよ。私の家が救われたのもこのこだわりのおかげだったのです。町が火事になったとき、私の家でもみな家財を持ちだして逃げようとしてしました。私はそれを禁じ、窓も戸もすべて閉めるように命じました。それから何人かの隣人と一緒に炎に立ちむかいました。私たちの努力は報われ、町の隅っこのこの一画は焼けずに残ったのです。翌朝、私のところではすべてが、今あなたご覧のとおり、何百年も前と変わらぬままだったのです。」「そうは申しませんが」とヴィルヘルムは言った、「人間は時がもたらす変化には逆らえないということをあなたもお認めになるでしょう。」「もちろんです」と老人は言った、「しかしもっとも長く持ちこたえる者は、それだけで相当なことをなし遂げたと言えますよ。」

「そうですとも！ それどころか私たちは、自分の存在を超えて自分を保ち守ることもできるのです。財産と同じように、後世に知識を伝えたり考えを委ねたりいたしますからね。しかし今のところ、私には財産のほう为主要な問題です。それゆえに以前より奇妙な用心を必要とし、独自の予防手段を講じてまいりました。しかし私の願いが実際に満たされましたのは、だいたいあとになってのことでした。」

「通常、息子は父親の集めたものを散財し、何か別のものを集めたり、あるいは別のやり方で集めたりするものです。しかし孫の新しい世代まで待ちつづけることができれば、自分と同じような嗜好や考え方が再び現れるものなのです。そういうわけで私もついに、教育家の友人たちの配慮によってひとりの有能な若者を得ることになりました。彼はひょっとすると私以上に伝来の財産を尊重しており、風変わりな物に強い愛情を感じているのです。彼は目をみはる働きで私たちの住まいを火事から守ってくれました。その努力によって、彼は私の信頼を決定的にかち得たのです。二重にも三重にも彼はこの宝ものにふさわしい存在になりましたので、私はこ

の所有物を彼に譲ろうと考えています。いえ、すでに彼に譲りわたしました。そのとき以来、私たちの貯蔵品は驚くほど増えつづけています。」

「しかし、あなたがここでご覧になっているすべてが私たちの所有物というわけではありません。むしろ、質屋で他人の宝石をご覧になる機会があるように、私たちのところでも、さまざまな事情からより良い保管を求めてここに置かれている貴重品をお見せすることができます。」ヴィルヘルムは立派な小箱のことを思いだした。それを携えたまま旅を続けたくなかったので、親しくなったこの男に見せずにはいられなかった。老人は小箱を注意深く観察し、製作されたであろう年代を挙げ、同じような品を見せてくれた。ヴィルヘルムの「小箱を開けたほうがいいのでは」という考えに対して、老人は反対の意見だった。「特別傷つけたりせずに小箱を開けることもできると思いますが」と彼は言った、「しかしそのような不思議な偶然からこの小箱を手に入れられたのであれば、あなたの運をこれにかけてみてはいかがでしょう。あなたが幸運な星のお生まれで、この小箱に何か意味があるとすれば、その鍵はきっと偶然に、しかもまったく期待もしない場所で見つかるでしょう。」「そのようなこともあるかもしれません」とヴィルヘルムは返事をした。「私自身も何度か経験がありますよ」と老人が返した、「あなたの目の前に非常に珍しいものがございます。この象牙でできた十字架像の胴と頭と両足の部分を、私は30年前から所有しておりまして、もっとも素晴らしい芸術作品として、注意深く非常に美しい容器のなかで保管しておりました。それからおよそ10年前に、私はこの像の一部であった銘の刻まれた十字架を手に入れたのです。こうなると私は、現代のもっとも卓越した彫刻師に腕を継ぎたさせようという誘惑にかられました。しかしこの素晴らしい芸術家でも先達には遠くおよばず、巧みな技法を賞賛するのではなく、敬虔な考察の対象としておくことでよしたのです。」

「ところが現在の私の喜びをご想像ください！ つい先日、最初についていた本物の腕が手にはいったのです。ご覧のとおり、このように美しく

調和してここに接合されています。私は幸福なめぐりあわせに感動し、ここにキリスト教の運命を認めずにはいられません。キリスト教はたびたび分裂してちりちりになりながらも、結局はいつもまた十字架のもとに集まる定めなのです。」

ヴィルヘルムはその像と稀有な運命に驚嘆した。「あなたのご忠告に従いましょう」、彼はつけ加えた、「小箱の鍵が見つかるまではそのままにしておきます。たとえ私が死ぬまでそのままであったとしても。」「長生きする者は」と老人は言った、「いろいろなものが集まり、また離れていくのを見るものです。」

ちょうどそこに財産を相続する青年が入ってきたので、ヴィルヘルムは小箱の保管を依頼する意思を伝えた。すると大きな帳簿が運ばれてきて、委託された品物について書きこまれた。いくつかの手続きや条件を確認すると、受領書が発行された。その証書は提示するだれに対しても有効であったが、受領者と申しあわされたしるし¹³⁾に基づいて取りひき¹⁴⁾されることになっていた。

彼らがこうして楽しく有益な時間を過ごしていると、ついにフェーリクスが丈夫な仔馬に乗って無事に到着した。フェーリクスに同伴してきた馬丁は、このあともしばらくヴィルヘルムに従って世話をするように言いつけられていた。レナルドーからの手紙には、くるみ色の少女の手がかりを見つけることができなかったことが伝えられ、嘆かれていた。ヴィルヘルムはあらためて彼女を探しだすために可能なことをすべて行なうよう懇願された。ヴィルヘルムは事情を主人に説明した。主人は微笑みながら言った、「私たちは友のために精一杯努力しなければなりませんね。ひょっとすると私は詳細を知ることができるかもしれません。大昔の道具類と同じように、私は古い友人たちとの関係を大切にしてきました。彼らによると、この少女の父親は敬虔さにかけて大変抜きんでいたそうです。敬虔な

13) 2稿では「特別な」besonder (FA10, S. 413) が追加される。

14) 初稿では geehrt, 2稿では honoriert (ebd.) に変更される。

人々は悪人以上に親密な人間関係をもつものです。たとえそれが外見的にはいつもうまくいっているようには見えないとしても。これをたどっていると、あなたが調査のために派遣されたその手がかりに行きつけるように思われるのです。しかしその前にまずあなたは、フェーリクスを同じような子どもたちが集まるところに連れてゆき、彼をある特定の活動に向かわせようという決心を遂行してください。フェーリクスと一緒に、急いであの大規模な教育施設にお出かけください。幹部と会うためにとるべき道をお教えしましょう。彼はそのときどきで別の区画に居住しているのです。手紙もお持ちいただきましょう。きっとお役にたつと思います。』¹⁵⁾

[第9章終わり]

15) この部分は2稿で全体に書き換えられる。内容的な変更点として、フェーリクスの到着およびレナルドーからの手紙は描かれぬ。蒐集家が自身の教育方針を語り、ヴィルヘルムに教育州を推薦する（初稿ではヤルノー＝モンターンの役割）。くるみ色の少女に関する蒐集家からの情報はない。

今回の試訳について

今回訳出したのは、初稿全18章の第8章と第9章であり、2稿の第6章後半、第11章、第12章に対応している。初稿第9章と2稿第12章は最終段落を除いてほぼ異同がないが、初稿第8章は、改作によって大幅な追加や改変が見られた。

初稿の第7章で、ヴィルヘルムはフェーリクスとともに大農場を営む領主の屋敷に迷いこんだ。続く第8章では、この家族のあいだで交わされた書簡のやりとりをヴィルヘルムがナターリエ宛て書簡に同封するという体裁で、「くるみ色の少女」の物語が始まる。物語の前半は、伯母を中心に、甥のレナルドー、姪の姉妹ユリエットとヘルジーリエとのあいだの手紙によって構成される。後半は、まずレナルドーがヴィルヘルムにくるみ色の少女との関係を語り、続いてふたりがこの娘を訪ねるが、別の女性と名前のとり違いをしていたことが判明し、娘探しはヴィルヘルムに委ねられる（つまりこの物語はこれで完結するわけではない）。

物語の成立は1807年8月4日の日記（「書簡体形式の女性たちの物語」）¹⁶⁾にまでさかのぼることができる。1809年11月19日の日記では「名前のとり違いのノヴェレ」¹⁷⁾と呼ばれている。1810年に執筆され、まず1816年版『婦人年鑑』（1815年刊行）で公表された。

『婦人年鑑』および初稿の「くるみ色の少女」は書簡体の部分とレナルドーの物語から成りたっているが、2稿では書簡体の部分が切りはなされ、レナルドーの物語の部分だけに「くるみ色の少女」というタイトルが付されることになる。切りはなされた家族間の手紙のやりとりの前後には、レナルドーの家族たちの描写が大幅に追加され、いずれも小説全体の主要テーマに発展している。たとえば2稿でフェーリクスに慕われるヘルジー

16) FA33, S. 219.

17) *Goethes Werke*. Hg. im Auftrag der Großherzogin Sophie von Sachsen. 143 Bde. Weimar 1887–1919, Bd. 81, S. 79.

リエは、ヴィルヘルムとのあいだで父息子の三角関係を演じる。父息子の確執と和解は、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（1795-96年、以後『修業時代』）から続く主題のひとつであり、『遍歴時代』のなかでさまざまに変奏される。アメリカからヨーロッパに戻ってきた伯父に対して甥レナルドはアメリカ移住計画を温め、『修業時代』の塔の結社に接近する。そして初稿ではまだ存在感が薄く、2稿で初めてマカーリエと名づけられる伯母は、この家族のみならず、小説全体の、さらには宇宙全体の中心的存在としてその意義を深めていく。

さらに初稿ではレナルドのアルヒーフからフリードリヒによって紹介される「気のふれたさすらいの女」(第16章)そして「裏切り者はどこに」(2稿では「裏切り者は誰か」)(第17章)が、2稿ではこの家族のあいだで読みまわされる原稿(つまりマカーリエのアルヒーフに所蔵)として場所を移して挿入される。ルヴァンヌ父およびその息子との三角関係に陥る女の物語「気のふれたさすらいの女」は、ヘルジーリエによる翻訳原稿となってヴィルヘルムに直接、手わたされる。ノヴェレには手を加えないまま、枠の小説世界とのあらたな関係性をねらった編集作業の典型的な例といえよう。

初稿と2稿の対照表¹⁸⁾

初稿		2稿	
		第1巻 第5章	<ul style="list-style-type: none"> ・姪や管理人と知りあう (追加) ・ヘルジーリエの翻訳「気のふれたさすらいの女」(初稿では第16章に挿入されている)
第8章	<ul style="list-style-type: none"> ・「ヴィルヘルムからナターリエへ」(移動) 「くるみ色の少女」 ・伯母, ユリエッテ, ヘルジーリエの間での文通 (移動) 	第6章	<ul style="list-style-type: none"> ・伯父について (追加) ・伯母, ユリエッテ, ヘルジーリエの間での文通 ・「ヴィルヘルムからナターリエへ」
		第7章	<ul style="list-style-type: none"> ・ヴィルヘルムは伯父の蒐集した肖像画や筆跡を鑑賞する ・ヴィルヘルムは伯母マカーリエ訪問を依頼される ・アメリカの家族の物語 ・ヴィルヘルムは若い管理人から, 読み物「裏切り者は誰か」を受けとる (すべて追加)
		第8章 第9章	「裏切り者は誰か」(初稿では第17章に「裏切り者はどこに」というタイトルで挿入されている)
		第10章	<ul style="list-style-type: none"> ・ヴィルヘルムとフェーリクスはマカーリエのもとに到着する ・ヴィルヘルム, マカーリエ, 天文学者の中で数学に関する会話 ・天文台のヴィルヘルム ・マカーリエに関するヴィルヘルムの幻想的な夢 ・アンゲーラと娘たちの集団 ・マカーリエのアルヒーブ (すべて追加) ・ヴィルヘルムはレナルドー訪問を依頼される
	<ul style="list-style-type: none"> ・ヴィルヘルムはレナルドー訪問を依頼される ・レナルドーはヴィルヘルムにくるみ色の少女との関係を物語る ・ヴァレリーネ訪問 ・ヴィルヘルムはナホディーネ探しを依頼される ・レナルドーは蒐集家のもとで「フェーリクスとナホディーネ情報を待つ」ようにヴィルヘルムに依頼する 	第11章	<ul style="list-style-type: none"> 「くるみ色の少女」 ・レナルドーはヴィルヘルムにくるみ色の少女との関係を物語る ・ヴァレリーネ訪問 ・ヴィルヘルムはナホディーネ探しを依頼される ・レナルドーはヴィルヘルムに蒐集家のもとに, 「そして教育州に」行くことを勧める ・相続されたが空き家となった別荘, レナルドーの志向 (追加) ・ヴィルヘルムはレナルドーに塔の結社を紹介する (追加)
第9章	<ul style="list-style-type: none"> ・ヴィルヘルムと蒐集家との会話 ・ヴィルヘルムは蒐集家に小箱の保管を依頼する ・フェーリクスの到着, ヴィルヘルムは教育州への紹介状を受けとる 	第12章	<ul style="list-style-type: none"> ・ヴィルヘルムと蒐集家との会話 ・ヴィルヘルムは蒐集家に小箱の保管を依頼する ・蒐集家の教育方針, ヴィルヘルムに教育州を勧める

18) フランクフルト版およびミュンヘン版の2稿対照表 (FA10, S. 1277–1279; MA17, S. 1068–1071) を参照しつつ筆者作成。